

第32回 自由学園美術工芸展

「実験室としての美術」

金井知子 酒井恒太

2020年の1月、第32回となる美術工芸展を11月に開催することが決定し、準備を開始したころ、新型コロナウイルスの感染が世界に広まった。4月には自由学園もオンライン授業となり、これまでに体験したことのない「日常」が始まった。

集まること、顔を合わせることができない状況で、どのように美術に取り組みばよいか試行錯誤の春。同時に、社会の中で「いまこそ、美術にできること」が問われていると感じ、美術の持つ可能性を生徒たちと探っていくことこそが、最良の美術教育ではないかと考えた。

そして、南沢キャンパスに作品を展示して多くの方をお招きする展覧会を断念し、新たな形態での実践と発表を行うこととした。

1. 「実験室としての美術」

美術の教員で集まり、美術工芸展の主旨について改めて議論し、以下の3点を主眼に、「第32回美術工芸展」としての企画を考えた。

- ① 作品の発表と鑑賞を通じて、美術についての学びを深めると同時に美術にとどまらない新たな気付きを得る。
- ② 自由学園の教育の内容を生徒の作品を通じて学内外へ発表する。
- ③ 日頃の美術教育を振り返る機会とする。

私たちが現在おかれている世界的なパンデミックは人類にとって脅威であるが、しかし、これまでも常に人類は未知なる世界を生きてきたのであり、どんなに科学技術が発展しても、不確かな未来に向かって生きていかななくてはならない。美術は、そのようにして生きる私たちにとって、この世界を探り、確認していくために機能する。そのような想いから、全体のテーマを「実験室としての美術」とした。

そして、具体的に下記の企画を行った。

- 1 ウェブギャラリーでの作品発表
(女子部 男子部 最高学部)
- 2 冊子による美術教育の発信
- 3 造形作家・批評家の岡崎乾二郎氏のワークショップと講演 (女子部 男子部 最高学部)
- 4 初等部小美術展

5 生活団造形 DEY の実施

本稿では、この5つの企画について記す。

2. ウェブギャラリーでの作品発表

学園キャンパス内での作品展示がかなわなため、作品の発表はオンライン上で行うこととした。「第32回美術工芸展ウェブギャラリー」を準備、実際の展覧会が行われる予定だった11月20日にオープンした。

ウェブギャラリーの構築には、まず作品の撮影をしなければならなかったが、前回の美術工芸展(2016年度開催)以降に制作された作品の中から展示予定で保管されてきた膨大な作品の撮影には多くの時間と労力が必要であった。また、初等部は、部内のみでの小規模の作品展を、幼児生活団幼稚園では、造形 DAY を設けることになり、以上の理由から、まずは女子部・男子部・最高学部の作品についてウェブギャラリーで発表することとした。

ウェブギャラリーの開設にあたっては、今回の美術工芸展にとどまらず、今後も継続して自由学園の美術教育を発表していく場としていくことにした。既に数年前よりスタートを切っていたインスタグラムでは、日々の美術授業での生徒たちの取り組みの様子をリアルタイムで外部へ発信してきた。一方で、生徒たちが作った作品に関しては、

一時的に各部で展示発表したのち、保管されることが多いのが現状だった。また生徒達へ返却しても、持ち帰ることが困難な美術作品は、生徒自身が自ら破棄してしまうこともあった。こういった経緯から、かねてより作品発表の場として新たにウェブギャラリーを設けたいという思いもあったからだ。

ウェブギャラリーの構成は、コンテンツを最小限にして、各部の生徒作品写真の掲載に注力し、内容の充実化を図ることとした。①あいさつ②ギャラリー③授業風景④お問い合わせ の4つのコンテンツにわけ、レイアウトなどのデザインにも気を配った。特に作品発表の場としてメインとなるギャラリーのページには、美術展後も無理なく更新継続が可能な様に考慮しつつ、アーカイブとしての意義も持たせられるよう、授業担当教員から、授業に際しての学びのねらいを寄稿することも検討した。

まずは生徒作品の写真撮影が大きな仕事の一つとなる。撮影用のライトやカメラなどの周辺機器を最小限の予算で揃え、学部美術棟の一角に撮影スタジオを仮設した。そして、過去数年間に渡る生徒作品の数々を、一つ一つライティングして撮影。データ化した作品の画像処理を一点ずつおこない、ウェブギャラリーへ掲載した。

それぞれの美術科教員が授業と業務の合間を縫って、これらの作業を行うことは簡単なことではなく、およそ3か月をかけて準備を行った。しかし、撮影作業をしていると、楽しんで取り組んでいた生徒たちの姿が思い起こされ、私たち教員にとって、この四年間の美術の学びを振り返る機会となった。それは教員にとって、苦勞と共に、喜びでもある。

今回の取り組みを経て、インターネット上に美術授業をアーカイブ化することで、生徒や教員にとっては、学びの振り返りや共有の場として、保護者や外部の方からは自由学園の美術の取り組みを知る場として、それぞれの目的でアクセスすることが出来るようになったことには大きな意義があったように思う。

ウェブギャラリーの冒頭に「実験室としての美術」と題し掲載しているテキストは次の通りである。

「実験室としての美術」

『自由学園の美術では、身近なものを観察することを大切にしています。観察とは、事物の現象を自然の状態のまま客観的に見ることです。そして、そこにあるものの仕組みや特徴を見つけ、自分の考えに基づいて手や身体を使い、試しながら形を探っていくことが造形活動の基本です。その時、美術は自身が感じたこと、考えたことを確かめる実験の場となります。

幼い子どもたちが絵を描き、ものを作りたがることは、自然に持ち得る欲求の一つとして認識されています。幼い子どもたちにとって、造形活動は未知なる世界との出会いであり、実験の場です。しかし、年齢が上がるにつれ、日本では学校教育の現場から美術の時間が減少し、多くの高等学校では美術（芸術）を選択科目としているのが現状です。

現代にあっても私たちの暮らしは常に不安定であり、また未知なるものです。コロナウイルスの存在は改めてその事実を感じさせます。未知なる世界とどのように対峙していくか？その模索が始まる10代というかけがえのない時期に、身の回りを観察し、自分の頭で考え、実験の場として美術を学ぶことを私たちは重要だと考えています。

さらに、美術は別々のものをつなぎ合わせるメディアム（媒介）の役割を持っています。美術を介して様々な眼差しが交差することで、自己と他者をつなぎ、社会と社会をつなぎ、自然と人間をつなぎ、過去と未来をつなぎます。生徒、学生一人一人が美術を通して世界とつながり、自由な視点と発想をもって歩んでいくことを願っています。

（自由学園 美術科）

自由学園美術科 HP/ウェブギャラリーを下記よりぜひご覧いただきたい。

<https://www.art-of-jiyu.com/>

2. 「第32回自由学園美術工芸展 in BOOK」

作品はウェブギャラリーで発表することができ、一方で他の部の美術の学びを感じにくい。美術は、年齢の小さい人からも多くを学ぶことができる。幼児生活団幼稚園にいる3歳の子どもから最高学部の22歳までの人たちが、この自由学

園で日々何を見て、何に触れ、どんなふう感じているのか、そしてどんな風に造形活動をしているのか、他者の存在を感じにくいコロナ禍だからこそ、伝え合うことのできるものを作りたいと考えた。

そこで、各部の美術の授業、造形活動の様子を感じられる冊子「第3回自由学園美術工芸展 in BOOK」を作製することにした。

冊子のデザインは非常勤講師の河原弘太郎氏に依頼した。河原氏のアイデアにより、冊子を含む複数のアイテムを布製バッグの中に詰めて、全校生徒に配布することにした。

バッグの中身は、1各部の様子が伝わる手のひらサイズの冊子 2生徒作品と美術教師の言葉を掲載したポスター 3ポストカード 4「アトリエのかげら」と題した付録品 である。

冊子の作製にあたり、女子部 男子部、最高学部の学生ほぼ全員に「あなたにとって美術とはどんなものですか?」「美術を通じてどんなもの(こと)を得ていますか?」という質問を投げかけ、生徒たちのことばを集めた。様々な言葉が集まり、改めて生徒たちが日ごろの美術の学びを通して多くを感じていることを確認できた。これは私たち美術教員にとって励まされることでもあった。いくつか紹介する。

「一人ひとりみているものが違うことがわかる」

「たくさん考える時間」

「勇気を出して何でもできる」

—女子部生徒の言葉より—

「世界に色をつけてくれるもの」

「想像と工夫の遊び場」

「自分自身との対話」

—男子部生徒の言葉より—

「集中することですっきりする」

「知らない形に出会うこと」

—最高学部生の言葉より—

以上の言葉には美術が、単に造形理論や表現のための技術の習得にとどまることなく、人格の形成や分野を超えた普遍的な学びに寄与していることがよくあらわれている。

冊子には以上のような生徒・学生の言葉と授業中の制作風景の写真を掲載した。

また、初等部は授業の様子と作品の紹介、美術講師の大村富彦先生の言葉を掲載した。その一部を紹介する。『桜の花びらの舞う南沢、新緑の色で覆われる校庭、遠足で訪れる山の色を心に描くことができなかった一学期は残念という以外ありませんでした。(中略)』

2学期になり、児童の気持ちを発散させる課題ではあるけれど命題を組み込んだ内容を作り、児童と共に試行錯誤を繰り返しました。(中略) 初等部の美術教育は構図や対象物の形を正確に描写する以上に、心の機微を画面上に表現することに重きを置いています。飛ぶ出るくらい力強い線、重量を感じるくらいのクレパスの色、そしてとても澄んだ水彩表現。来年度はどのように春の色を描き始めるか。考えただけでも楽しくなります』

そのほか、長年美術教育に携わってこられた武藤岩雄先生、最高学部長の渡辺憲司先生にもご寄稿いただいた。この場を借りて改めて感謝したい。

更に、美術室で生徒たちが作品を作った後の、木片、石のかげら、布の端切れ、糸くず、紙端、など、つまり処分されるようなものを組み合わせ、小さなアートピースにして「アトリエのかげら」として封入した。この小さな造形遊びは生活団の子供から学部生まで、多くの生徒・学生が参加した。各人の手元にわたった、布製バックの中には、一つ一つ違う「アトリエのかげら」が入っている。そこに他者の造形活動の痕跡と息遣いを感じてほしいと願った。

また、布製バッグには生活団の子どもの絵を印刷した。盛りだくさんとなった「第32回自由学園美術工芸展 in BOOK」は、コロナの影響で「展示された作品によって日常の景色が変わる」という体験をできなかった生徒たちに、美術を通して少しでも他者の存在を感じてほしいという、美術科教員の願いが詰まっている。

3. 岡崎乾二郎氏を招く

「美術」とはなにか?、「なぜ美術を学ぶのか」という問いは日々の授業、生活の中に常にある。この問いについて美術工芸展を機に少しでも客観的に考える機会を持ってないかと考えた。また、生

徒学生たちだけでなく、自由学園の教職員も美術への理解を深める機会になってほしいと考えた。従来の美術工芸展は、生徒学生だけでなく、教職員や保護者といった大人たちにとっても多くの問いを投げかけていたはずだ。

そこで、造形作家・批評家として活躍されている岡崎乾二郎氏に講演を依頼した。氏は唐突な依頼を快く引き受けてくださったうえ、講演だけでなく「美術とはなにか」を一緒に考えられるようなワークショップをご提案くださった。女子部中等科3年と男子部中等科1年のクラスを対象に11月27日、1月22日と29日の計3回のワークショップ、2月6日にはワークショップの成果も取り入れて「時空を超えたコミュニケーション」と題して講演をしてくださることとなった。

一回目のワークショップは「誰かの痕跡を探そう」というテーマで行われた。『「誰か」というのは、人とは限らない。動物、自然、あるいは・・・?』という岡崎氏からの問いを受け、生徒たちは学園内を歩き回り、痕跡をみつけたら写真を撮影。ワークショップ後半では、撮影した写真を見合い、どんなことが「発見」できるか話し合っていくという内容。日常空間をテーマを持って見直すことで、そこに多くの発見ができる、その発見によって、時空を超えて過去や未来、自然や動物あるいは未知なるものともつながっていくということを感じ取るワークショップである。このワークショップでは生徒たちの「視点」がよく表れた写真が集まった。そのユニークさ、また意図せずして映り込んでいるものから、岡崎氏が多くを引き出して解説して下さり、驚きと発見のワークショップとなった。

2月には、古本屋などで安価で販売されたり、廃棄予定となっている画集、ポストカードなどを集め、画集の印刷作品やポストカードの絵の上に描き足していくというワークショップが行われた。今度は、過去の作品と現代の私たちが作品を介してコミュニケーションするというのが狙いであった。他者の作品に描き重ねるためには、まず、元の「作品を見る」ことができなくてはならない。どのように他者の「作品」を捉えるか、作品（または何か事物）を鑑賞したとき、自身が感じ取っているものに自分で気づいていくための演習も行

われた。ここでも生徒たちは臆することなく、過去の名画に楽しんで絵を重ねた。描き重ねることで、あらたな「作品」となり、まさに過去の作家と現代を生きる生徒のコラボレーション作品となった。中には非常に魅力的な画面となった作品も誕生した。今回誕生した作品は本棚に入れて、今後も美術室で閲覧できるように整える予定だ。

ワークショップに向けて、岡崎氏とは幾度かにわたり、オンラインで打ち合わせの機会をいただいた。都度、多くの示唆に富んだお話をいただき刺激的な学びの時となった。準備段階では中学生にとって難解ではないかという一抹の不安もあったものの、女子部中等科3年生、男子部中等科1年生は共に心を開き、応答した。かれらの持つ感覚の豊かさを岡崎氏が認めてくださり、穏やかに親しみを持って生徒たちに語りかけてくださった。生徒にとっては新鮮な内容であったと思う。

講演はコロナの感染者が増加したこともあり、オンラインで美術教員が岡崎氏から対話形式でお話を伺い、編集して60分ほどの内容にまとめ、女子部男子部最高学部の生徒・学生、教職員で鑑賞するという形式になった。一同に会して、講演を聞くことはかなわなかったが、オンラインを利用して、保護者や学園関係者に広く配信できた。

「時空を超えたコミュニケーション」と題した講演では、先述のワークショップの内容を紹介したうえで、その応答に始まり、私たちが日常の中で、気付かないこと、そこにあるのにみえていないことがいかにたくさんあるか。日常の中に埋没しているものでも、様々な角度から観察し、発見することで、新たな視点を見つけ出すことができる。そして、「造形」を通して、我々は、過去、未来、場所といった時空を超えて、他者とコミュニケーションがとれる。また、「造形」を介してのコミュニケーションは人間同士だけではなく、動物や植物とのかかわりにも及ぶ、という岡崎氏のメッセージが凝縮された内容であった。そして、「どんなものも矯めつ眇めつ観察し、角度を変えて考えることで新たな発想が生まれる。あふれる情報に振り回されることなく自分の頭で考えて作り出すことができる人たちが育っていくことを自由学園に期待したい」と結ばれた。

3回のワークショップと講演を通じて難解と思わ

れがちな「現代アート」の中に、「美術とはなにか」「美術が我々になにをもたらすか」という問いへのヒントが多くあることに気づいた人もいたのではないかと思う。

これまでも自由学園の教育と環境に対して深い理解と関心を持ち続けてくださっている岡崎氏の講演は、改めて「美術の可能性」を問いなおし、わたしたちが「どのように生きるか」という命題と美術がつながっていることを示唆するものであった。今すぐすべてを理解できなくても生徒たちのなかに、確かに良質な種がまかれたと思う。

お忙しいなか、惜しみなくご尽力くださった岡崎氏に心より感謝申し上げたい。

4. 初等部と幼児生活団幼稚園の取り組み

初等部では2月に「小美術展」を開催した。これは美術工芸展の行われない年に、例年行われている、初等部体育館に一年間の子供たちの作品を展示する企画である。本年もこの「小美術展」を行い子供たちが互いの作品を見合う場を作った。保護者を招くことはかなわなかったが、子供たちにとって、自分の作品が展示されること、友達の作品に直接触れること、作品についての講評を聞きあうことは、他者とのかかわりが薄くなっているコロナ禍において、貴重な機会だったと思う。初等部体育館にあふれる子供たちのエネルギーに励まされる思いがした。

また幼児生活団幼稚園では、11月に2日間「造形 DAY」を企画。朝登園後から、14時の解散までの間、一日中造形遊びを行った。生活団では、これまでも子供たちの造形活動がさかんに行われてきたことは言うまでもないが、それらは「美術の時間」としての取り組みであった。子供たちの「自由遊び」をさらに発展させていきたいという園の改革にともない、「自由遊び」のなかに子供たちが自発的に「造形遊び」ができるようにしたいと考え、生活団教員と美術科教員で何ができるか考えた。場所や設備などの制約があり、普段はなかなか、造形に必要な材料や素材を子供たちが自由に使えるように出しておけないといった問題があり、子供主体での造形活動が発展しにくいという現実がある。

そこで、2日間ではあるが、大人が作るものを決めるのではなく、自由遊びとしての造形活動ができるように環境を整えてみることにした。絵の具のコーナー、段ボールや紙のコーナー、自然物や、布、糸、木っ端などの素材コーナーを設け、釘や金槌などの道具も準備。子供たちは登園するといつもと違う園内の様子に最初こそ戸惑っていたが、すぐにそれぞれが何かを見つけ、自分の好きなことで遊び始めた。一人で黙々と手を動かしている子どももいれば、友達と協力して、作りたいものをつくっていく子供たちもいた。「何をしていいかわからない」といった様子の子供はなくそれぞれが思い思いに遊んでいた。なにか具体的なものを作る子もいるが、ただ釘を打つ、紙を細かく切ってみる、絵の具こぼしてみる、色水をつくってみるなど、用意した素材を使いながら、自分で実験し発見していく子供たちの姿を多く見ることができた。教員にとっても多くの発見と学びがあった。

今回の企画は、「作品をつくる」といった目的をもった造形活動とは別の「造形遊び」を生活団でこれからどのように保育の中に取り組みんでいけるか、その手掛かりを考えるきっかけに過ぎない。イベントに終始せず、日常の「遊び」が豊かになるよう今後の生活団における「造形遊び」の発展に期待したい。

5. コロナ禍での美術の学びについて

美術工芸展にとしての企画は先に述べたとおりだが、最後に、新型コロナウイルスによるパンデミックとなった2020年度的美術科の取り組みについて記したい。

学校に通えなくなりオンライン授業となった一学期、生徒たちの学びをいかに担保出来るか、美術科内で議論を重ねた。実技科目であり、直接素材に触れ身体を動かして学ぶ活動をカリキュラムの中心に据えている美術科にとってオンラインへの対応は非常に悩ましい問題であった。オンライン課題には実技演習の限界があったが、鑑賞を通じて、それぞれの「美術」に対しての視野を広げる機会としてもらいたいと考えた。また、材料や素材がなくても、身の回りにあるもので造形する課

題も考えた。発想次第で美術はできる、どんな環境でも柔軟に考える力を育むという美術にとってもっとも大切なことを問い直したつもりである。

女子部男子部ではオンライン課題を通じてのメッセージのやり取りにより、対面授業とは異なる形での生徒一人一人との往還が生まれ、個々にフォーカスした指導にも繋がった。一方でオンラインでの学びに難しさを示す生徒も多かったように思う。その点、対面授業再開後は、感染対策を互いに意識しつつ、学園の豊かなキャンパスの中でのびのびと取り組んでいた様子は印象深い。また、学部では、これまでの普段の対面授業では制作する時間が多くなる分、造詣の深化に課題を感じていた側面があるが、オンライン期間で基礎調査やディスカッションなどの考えを深める機会を多く得る機会にもなったようにも思う。初等部でも「絵しりとり」をオンライン上でおこなったり、絵手紙を書いて学校に送るなどの試みがなされた。

また授業を無理やりオンラインで行うのではなく、こんな時だからこそ美術を通じて、他者とつながる楽しみをと思い「自画像プロジェクト」を立ち上げた。自宅にある描画材で自画像を描き、作品の写真をメール等で送ってもらう。それを美術科のインスタグラムにアップしていくというシンプルな企画だ。これは生徒たちだけでなく、教職員も含めだれでも参加できる企画とした。投稿を希望しない生徒もいたが、多くの自画像が集まり、インスタグラムには次々とさまざまな「顔」が並んだ。直接他者と触れ合えない状況、他者の息遣いが聞こえにくい日常のなかで、手で直接に描かれる線の一つ一つに、画面越しでも「生身の他者」をわずかに感じ取れるような気がした。

6. おわりに

予定していた「美術工芸展」は開催できなかったが、予期せぬ社会の変容のなかで、貴重な10代の学校生活をこのような状況で送らなければならない生徒たちと学校という場で何ができるか、さらに、閉塞的な社会に対して「美術」はなにができるか問い続けた一年であった。そしてこの問いへの探求はこれからも続く。

結果がうまく想定できないこともあったが、

できること、思いついたことを、とにかくやってみようと、まさに「実験」と「挑戦」の連続であった。

今年度、他者の作品に直接触れる機会、展示によって学園内の景色が変わるといった実感の伴った経験の機会は減ってしまった。今までのそうした経験から得ていたことは今後どのようにして得ることができるのだろう。

我々にとって、真に他者と「分かり合う」ことは、容易なことではない。しかし、そもそも美術は「分かり合えない私たち」を前提として、成り立つものではないかと思う。作品を介して、「社会と私」「私と他者」が関わっていく。「他者」は人間に限らない。美術は、決して一人では生きることのできない人類が、社会を営むために生み出した発明だ。

「モノ」のもつ力は、映像や言語で語りきれないものであり、作品そのものが「そこにある」という事実は、時に多くを語り多くを伝える。

3万年前に洞窟に描かれた（とされる）壁画に対峙するとき、私たちは時空を超えて、その時、その場に確かに生きていた人たちに触れることができる。今子どもたちが作り出す造形もまた、社会や未来とつながっていくものである。

このような時代だからこそ、美術の可能性、造形の力を信じて、子どもたちと共に、感じていること、考えていることを確かめるために造形という実験を繰り返していきたい。その豊かさを感じ取れる心を子どもたちに培ってほしいと心から願う。作品主義に陥らず「実験室としての美術」を実践していきたい。

2020年度美術指導

(本務教員)

中村知子 金井知子 酒井恒太 山下美記

成田智哉

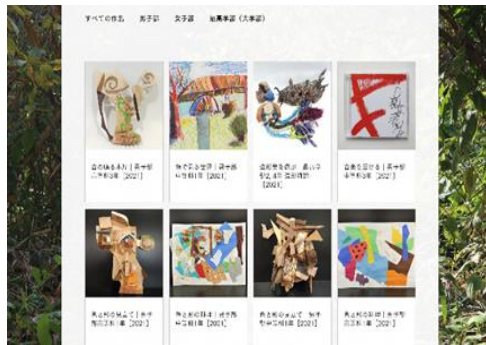
(講師)

大村富彦 田村満恵 武藤岩雄 清野圭一

瀬尾道子 河原弘太郎 石川愛 中島美静



〈ウェブギャラリーのための撮影〉



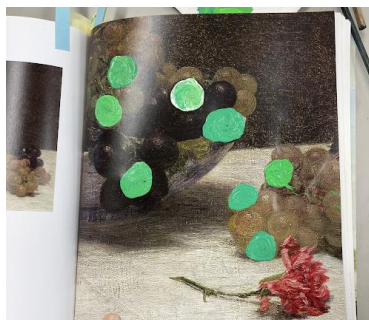
〈完成したウェブギャラリー〉



〈第32回美術工芸展in Book〉



〈岡崎乾二郎氏の授業〉



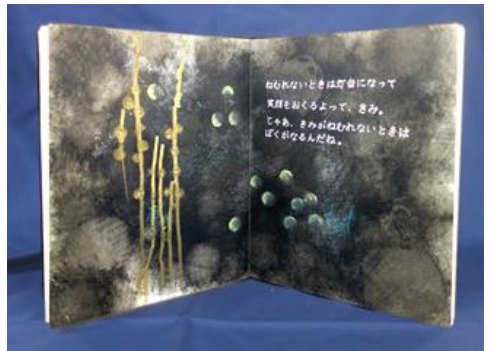
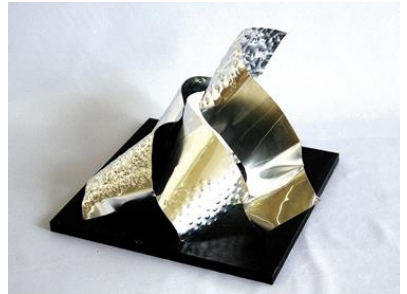
〈岡崎乾二郎氏によるワークショップの様子 女中3 男中1〉



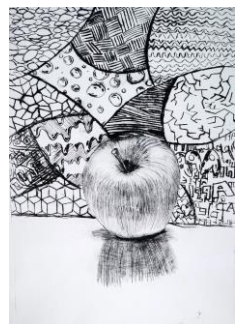
〈幼児生活団幼稚園造形DAYの様子〉



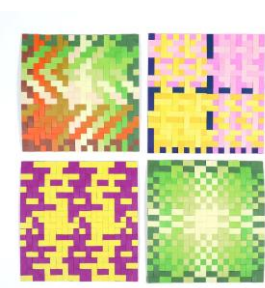
〈初等部 小美術展の様子〉



<女子部生徒作品 ウェブギャラリーより>



<男子部生徒作品 ウェブギャラリーより>



<最高学部作品 ウェブギャラリーより>



<美術授業の様子>